



俳諧七部集

阿蘇野
附
負外

七

中村俊定文庫

文庫 18

685

7



木瓜

曠野集貞外

誰う毒をねむらむとて

市中にあきて朝のくさき

又舞一糸東四明み麓り

よて花のころもかこゆをん

とつて佐川田喜うのうの山

あこあくとらるるまも

くうんす又

○ 麦くさし唇とさくさつり

世夕尾陽の野ふらむ作

芭蕉公翁の傳へし



柏木の脚元の比のつゝと
 さゝやうことのまゝ実する
 月乃氣とて合とたりとお積
 秋となふとて事里乃酒桶
 高の志とて続歩移とて事
 うわとて事のぬる彼乃事作
 かこある諫とて海とて事
 火箸とて事とて事とて事

水 人 今 水 人 今 水 人 今 水

うくすものいふ事
 むせいの事とて海乃か
 正事の事とて事とて事
 押とて事とて事とて事
 黒土とて事とて事とて事
 大根とて事とて事とて事

水 人 今 水 人 今 水 人 今 水

遠はや浪に志をたす瀬と季

はるれ舟るる酒のまじりし
荷今

のとまきやあがり泊ふ何と解て
昌碧

百足乃懼る葉と三片々如糸
野水

夕月の雲は白たをくら縁
舟泉

秋寒の蓑も裾よりさす
釣雪

糸洞

秋乃屋とともてきく地所そや 筆

一駄るしし是と古錦 龜洞

そののる色よきききききき麻 荷今

系す終出やねあふと年一栄 昌碧

いしよあてりては蔵造 釣雪

湯殿まののこもむいし川也 舟泉

涼しやと慈とくく川の錦 野水

いしあはれおとふ 月 荷今

秋風より女車の髪ねとさ 龜洞

神そあはれとく 浮城も法輪 釣雪

時しよあはれとく 妙のま 昌碧

いしあはれとく 妙のま 野水

日乃いてやらふら何もん暖り 舟泉

いしあはれとく 妙のま 龜洞

向まて寤やるほのふあひにて 荷今

垢離かく人のまののびきき 昌碧

歌

員一よ銀くまかり事あり

舟泉

柳のくみかきさかり乃卿

松芳

夕雲の深おろそくく人

冬文

きくまやまよえゆる月影

荷今

秋草のそよもあま極いそ

松芳

弓ひささゆる勝相模とく

舟泉

ふも赤ももの拾ひむとら知る 荷今

ふもくく 砂の中み本のそ 冬文

火ノ風の皮みまぢるるく 舟泉

隙見せしやうら笑はつ 松芳

さるさる紫端まらしてそる 冬文

酒の半く膳もちてる 荷今

果る年一ぢ順礼もをす 松芳

くまら双魚の糸絡まはえよる 舟泉

なつゆりともうら志をまらるるの息 荷今

月のたほらやぶる多井一乃月 冬文

灯にまぢた月ひつてまの風 舟泉

珠をまらるるの息のそ 松芳

陰辰も入齒くまの志はる 冬文

十日のこくみわしとる 荷今

山星の秋まらしと生 松芳

そ持かめくく入るやとむ 舟泉

馬乃とせむ池へくるのいあ〜く 冬文
 さひ〜さきと垂井の宿のあは雨 舟泉
 庭ぬま〜と葦まあふ〜と申 松芳
 つ〜とと綿〜と〜の〜と 冬文
 暖ぬ〜と〜提燈品 ともむ 荷今
 け〜の花と〜とあむす〜と〜と 松芳
サぬ〜と〜
 味増〜と〜と〜の隣〜と〜と 舟泉

瀑

芳曾乃門と〜と〜と新分 荷今
 沙舟〜と〜と〜と〜と 冬文
 暮結於赤貝と〜と〜と〜と 舟泉
 新見〜と〜と〜と〜と 松芳
 白〜と〜と〜と〜と 冬文
おと〜と〜と
 物〜と面白〜と山口の家の 荷今

わさささす 結ぬかのおよわき

荷今

雨のわりあふくこてす戸の口 野水

川 控 車ハ琵琶のかんざい 同

あささう那くくもく人のくかひ 荷今

月の秋旅乃きここちもや 同

一ッ何にまひし 西海乃きこくけ 野水



月さーのほもさーの昼のひもさーあさる
ねーろさー柄もさーさーさーさー
園に帝釋法師のりふをすさーあさる
多のささるさーさーさーさーさーさー

月さ柄をさーさーさーさーさーさー

蚊のねるほつささささあさる物 越人

さ川くらささささささささささ 傘下

ねあひらささささささささささ 同

さ木柱つささささささささ 人

使の者ささささささささ 同

○あはれと猫の子を選りしは筆

や——ききもあはれなり下

とこもあはれあはれあはれ同

あはれあはれあはれあはれ人

大勢乃人よ法華をこあはれ同

月より夕に夕籠纏う下

あはれあはれあはれあはれ同

秋乃きききき細みる人

うのあはれあはれあはれ同

あはれあはれあはれあはれ下

○花のあはれあはれあはれ同

あはれのあはれあはれあはれ人

うらあはれあはれあはれあはれ同

あはれあはれあはれあはれ下

あはれあはれのあはれあはれ同

あはれあはれあはれあはれ人

歌あそむ指名強首おひしむ 同
 ちり猷立のしぬちのむきあそ 下
 芥其油のしぬちのむきあそ 同
 白とたせしむちのむきあそ 人
 ぬく凡そぬのしぬちのむきあそ 同
 半ちこさす ぬのむきあそ 下
 ちりぬのむきあそ 同
 人の徳とぬのむきあそ 人

はちりぬのむきあそ 下
 テもあそむのむきあそ 中 人
 ちりぬのむきあそ 下
 皆同むきあそ 佛 人
 百一ちりぬのむきあそ 下
 回無とちりぬのむきあそ 人

深川の巻

越人

○ 舟のこゝろ志川くまふまうひまや

○ 浦志あめ〜婦このは乃月

芭蕉

〜あま〜は催ふ水あせこめてん

全

理をとれま〜は秋乃り〜は

越人

○ 瓢箪の大きさと五石と〜りや

全

○ 風よ婦のせ〜帰るる市人

芭蕉

巻

七

かゝるよも長安の是れ利の地 全

醫のねむるを月くちか 蕉 越人

いそしと所を乃ちくちか 蕉 越人

あつたや治やくすむけり 蕉 越人

比里と古さをあつたはくちか 蕉

足張ちのち雨乃あけほの 越人

きぬ やあつたあつたあつた 蕉

あつたあつたあつたあつた 越人

あつたあつたあつたあつた 蕉

あつたあつたあつたあつた 越人

あつたあつたあつたあつた 蕉

あつたあつたあつたあつた 越人

あつたあつたあつたあつた 全

あつたあつたあつたあつた 蕉

あつたあつたあつたあつた 人

あつたあつたあつたあつた 蕉

人 去 っ て い ま す 正 聖 乃 白 ひ 々 々
 幼 衆 と 繁 る 堂 々 々 片 隅
 本 々 々 々 々 々 風 の あ る 々 々 々 々
 畑 穂 の こ し 歩 々 々 々 々 々 々 々
 あ や へ へ へ へ へ 妹 々 々 々 々 々 々
 何 の き 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 月 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 石 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

秋 の 田 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 ち 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 っ 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 死 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 宅 の 比 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 甲 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

翁之伴たる所くまの人の

きりりー 有るー 具角

○ 若くはく荷字能文也天降一

三枚との月見茶室のついで 越人

昔昔の庭より花のついで 全

飲してのむれくそあらそふまゝ 角

唯うまけ福くけくも復衣 全

齒とまゝくはくあつたのう 人

六

七

○ 恨むる間よあはれなるあはれなる

人

○ 静浄前へ舞をすまはる

角

○ 空蟬の雛魂ちねのねま

全

○ あとまのうらまの金二万両

人

○ いとまのいとまの他人もあはれなる

全

○ やちとあはれなるあはれなる

角

○ 間諜と身とくしあはれなるあはれなる

全

○ 負をもつてぬ月のねみ舟

人

○ そまいろいろの富士と浅きと秋の秋

全

○ せまのあはれなるあはれなる

角

○ 饅頭をうけとけと包とる

全

○ うき世とつたて死ぬ人の損

人

○ 西王母東方朝と月よあはれ

全

○ よしや鸚鵡の舌乃とる

角

○ あらとさなやあはれなるあはれなる

妻

全

○ 恋の親とあはれなるあはれなる

人

や、たぬひる疾もーおし御守
 来つゝ青ち原一芝たかり
 夕霧宿のそとく服乃とて
 いし川のほきをそ存よ強力
 穴いちよ塵うちちうひ草一枕
 ひいあをさかしく伊珠の八朝
 満月と不斷梅を流えりや
 念者法師く秋のあまの海

全 角 全 人 全 全 人 全 人

父まら御守くくくくくくくく
 うらうらうらうらうらうら
 ちんちんちんちんちんちんちん
 そのそとくくくくくくくく
 ちのちまあはつと眩ととや
 ちんちんちんちんちんちんちん

全 角 全 人 全 全 人 全 全

嘆續
 ちんちんちんちんちんちんちん

嵐雪

あそびしもの人の醒や死

秋うや寒しいつと陽の縁 越人

月の宿書をしりちりすや ねて 全

お面茶の草一もけさり 雪

ちとあひく牧こや らぬ 全

川越る流を横下の の 人

疱瘡白の透とまのなまの
 唱のささくす色あまのさ
 あまのささくす色あまのさ
 後さひよさくす色あまのさ
 とおとさくす色あまのさ
 乃能さくすかへる良人
 是物を礎とてと川腕
 明日と形友さくす月の影
 人 雪 同 越 人 嵐 雪 越

志さくす乃群さくす女さくす
 つまの醫者乃後深あや
 ちさくす日さくすれさくす
 とさくすさくす何さくす人
 人 越 雪 人

野水

○ 初雪やことゝのひさし 桐の末に

月のみ——うきやまののち起 落梧

山川や物の喧しきものもさうすん 全

舟を遠かしくかきかき 野水

おあふさま押合月を鼻外つ 同

○ あ~~~~~~~~しも櫃から秋 落梧

川越乃歩よそ所の種の雨
ぬふと痛くも秋のまいりな
つるせこまきつりあへかき縁め
すうこまおよ比のこまけしひ
更る水のゆをむつりとあ飲
こそくつり起す相伝と後
岸の松あちあちつりを足かき
旅を新うららのらまの聲さ
梧 水 梧 水 梧 水 梧 水

烹く玉子あまのぬまこと一文
下戸も皆いく月の水不ろき
耳や齒やくくも玉子教あす
夕は是免と寝くまの初午
い川やうもまのすぬ母がた
山伏伝る人志る伝たああ
ころりくとくまひぬきああ
柗灯あく伝園さあく
水 梧 水 同 梧 水 梧 水

何よりを泣き止む髪を振おほひ

梧

きりくおとせぬは紙あき

水

まじりしもの馬より

梧

うらなふ中を詔福あつり

水

雨やうきれちまへ面白

梧

柳ちよのて倒の慈道

水

新なるく月丁とさり飛ぶ十間

同

寂しぞ秋浅女まほなり

梧

占むよへくちよ

水

未だもくちよ

全

船もの千景備る

梧

誰とてもいそ入見

同

まじりしもの馬より

水

おとせぬは紙あき

梧

一里能炭賣きいつ多を能也

かきひの芝能瓶氷る朝

ささくは也正本を引く後也

肩きぬさつ酒くさふ人

夕月能入ささく早き揃さハ

たつらに鯉をつらさむ秋

一井

嵐彈

胡及

長虹

嵐彈

一井

里深く誦あけし二三月

長虹

ま司の妻とわれら共く

胡及

向ひ終くは涙の如く

一井

昔亀とくさく切なき文

氣彈

うらぐし也家紀たのし湯と

胡及

空ゆく東羊の越み雪鋤

長虹

なごころりよとあひてはらち

氣彈

蛤とアさく女中

一井

浦風之脛吹まくる月夜

長虹

みるもかゝる化紀作の魂を

胡及

み者乃さゝ矢射てける

一井

蒜とくぬ香く遠さう

氣彈

はものう終あましくも

胡及

成の子乃綿乃裾とあつ

長虹

そかゝる内もさう

氣彈

座安もあある蚊屋を

一井

木もささぎにあはるしげり 松の枝 長虹

○ 稗にうる人 乃真 胡及

けふ年一なるもく 炎の跡もささぎ 一井

はくくもせきくついで入月 嵐弾

ささぎく障子の陰路うそささぎ 胡及

こささぎくささぎくささぎくささぎのさ 長虹

○ 沙も極入ささぎのささぎのささぎのさ 嵐弾

衣引もある人のささぎ 一井

毒ありと氏一ささぎもささぎのさ 長虹

片風めらくささぎのささぎ 白雨 胡及

板もささぎくささぎのささぎのさ 庭の内 一井

ささぎのささぎのささぎのささぎのさ 角丸 嵐弾

ささぎのささぎのささぎのささぎのさ 長虹

見わたすささぎのささぎのささぎのさ 胡及

寬政七年乙卯春三月再刻

皇都書林

筒井庄兵衛
中川藤四郎
野田治兵衛
行梓

芭蕉翁

俳諧七部集續編

深川卯辰集音讀海極也
韻子芭蕉集小文集子多抄

小刻全部二冊出來

